

紹介と書評「奇跡の脳」(ジル・ボルト・テイラー著)

田中正治

本書は、神経解剖学者であるジル・ボルト・テイラーが37歳の時、突然、脳卒中で倒れ左脳言語中枢機能マヒを起こす過程で起こった脳内の驚異的な変化を、科学者の目で記述したのみならず、8年間にも及ぶ左脳回復の苦闘を記述したものである。

そこには左脳と右脳が果たしている驚異の姿が克明にえががかれていて、人間とは何者なのか、人間の存在のありようを深く考えさせてくれる貴重な記録である。彼女のTEDでの迫真の講演動画を張り付けます。ご覧ください。

TED 日本語 - ジル・ボルト・テイラー: パワフルな洞察の発作 | デジタルキャスト (digitalcast.jp)

著者ジル・ボルト・テイラーは、米国生まれの神経解剖学者。インディアナ州立大学で博士号取得後、バーモント医学校で脳と神経の研究に携わり、マイセル賞を受賞。全米精神疾患同盟理事を務めた。2008年にはタイム誌の世界で最も影響力のある100人に選ばれている。

1996年12月10日、朝目覚めると、ジルは脳卒中になったことを発見した。4時間の間に自分のところが感覚を通して入ってくるあらゆる刺激を処理する能力を完全に失ってしまうのを見つめていた。左脳の言語中枢の出血が、歩いたり、話したり、読んだり、書いたり、また人生のどんな局面をも思い出すことができなくなってしまった。

「頭痛の中で左脳の言語中枢が、徐々に静かになるにつれて、心が和み高度な認知能力と過去の人生から切り離されることによって、意識は悟りの感覚、あるいは宇宙と結合して「一つになる」というところまで高まっていった。」(p37)

「傷ついた脳の中で広がる虚空に、うっとり見せられてしまいました。脳の中に静寂が訪れ、絶え間ないおしゃべりからひと時解放されたことが、うれしかった。」「私はひたすら焦点を内に向け、何兆もの輝く細胞の変わらぬ努力の繰り返しに気持ちを向けました。」(p40)

「奇妙ですが、幸福な恍惚状態に宙づりになっているように感じました。そして、突然訪れた脳の複雑な機能への巡礼の旅に、生理学的な裏付けと説明があると分かった時、小躍りするような気持ちになりました」(p43)

言語と記憶をつかさどる言語中枢機能がなくなると、認知像や概念の広がりがないので、時間の感覚がなくなり、過去の記憶もない。そして自分が何者かの記憶も置き去りにされる。

[パーキンソン型認知症と似ているようだ。「認知症の人が見ている世界」\(文響社\)](#)

「現在の瞬間だけしか焦点が合わず、ズキズキと波打つ脳は、まるで万力にて締め付けられたかのよう。地上の時が止まった余裕の底で、地上の肉体も失われ、宇宙の中に溶け込んでいきました」(p53)

「右脳は左脳の支配から解放され、知覚は自由になり、意識は右脳の静けさを表現できるように変わり、解放感に包まれ、仏教徒なら涅槃の境地に入ったというだろう。」(p53)

[涅槃とは、「煩惱の火が消え、人間が持っている本能から解放され、心の安らぎ](#)

を得た状態のこと」を指す、とされている。涅槃かどうか分からないが、「臨死体験」した時の僕の記憶は、一瞬そういう境地を味わった感覚がある。

40歳くらいの時、山梨県甲府の山中にある断食道場でのこと。長期断食が終わったその日、僕は道場の広間で倒れたらしい。

”山の中腹にいて膝を揃て座っていた。足元には赤や黄色の花々が一面に咲いていた。いわゆる「お花畑だ」。ここでは穏やかで何とも言えずやらいでいる。幸福感に満たされている感じ。しばらくすると、右のほうから、横笛のような柔らかい笛のような美しい調べが聞こえてくる。ああ、きれいな曲だなと、ぼ〜と聞いていると、突然ザワザワという耳障りな音が聞こえてくる。うるさいな〜と思ってパッと目を開けてみると、10人くらいの人が、「どうしたの、どうしたの、大丈夫」と言ってくる。”そこで、初めて、ああ、道場で倒れたんだと気付いた。

横笛の調べについて行っていたら、ひょっとして「三途の川」を渡っていたかもしれないと思ったりもする。でも、あのころやすまる感じ、幸福感は何だったのだろう。左脳の支配から解放された右脳の世界とはそういうものなのだろうか。

著者は続ける。

「左脳の分析的な判断力がなくなっていますから、私は、穏やかで、守られている感じで、祝福されて幸せで、そして全知であるかのような感覚の虜になっていました。」(p54)

左脳の認知力がシステムごと崩壊していくと、時間は停止、こころの中の関係性の概念がなくなってしまうので、簡単な数学の計算ができず、脳は組み合わせができなくなってしまう。「断片的な機能を集まりとして定義する左脳がなければ、意識は制約されることなく、神が宿る右脳の安らかな幸福感へと向かってしまうのです。」(p80)

「1996年12月10日のちょうど昼前、私の分子群の活力は低下していきました。そして、エネルギーが底をついたと気づいた時に、意識は身体機能との結びつきも、指令も出すことを放棄したのです。静かな心と平穏な気持ちで、聖なる繭の内部に深く囚われて、切り離されていくエネルギーの大きさを実感しました。」「視覚、聴覚、触覚、収獲、味覚、そして恐怖感もなくなり、心はこの体に対する愛着を捨てたんだ、そんな風に感じました。そして苦悩から解放されたのです。」(p84-85)

「左脳は、自分自身を、分離された個体として認知するように訓練されています。今ではその方ぐるしい回路から解放され、私の右脳は永遠の流れへの結びつきを楽しんでいました。もう、孤独ではなく、淋しくもない。魂は宇宙と同じように大きく、そして無限の海の中で歓喜に心を躍らせていました。」(p96)

そのような事態を彼女は、科学者の目でその本質をとらえていると思える。

「私たちは、確かに静かに振動する何十兆個という粒子なのです。私たちはすべてのものが動き続けて存在する流れの世界の中で、流体でいっぱいになったふくろ(囊)として存在しています。異なる存在は、異なる密度の分子で構成されている。しかし、結局のところ、すべての粒は、優雅なダンスを踊る電子や陽子や中性子といったものからつくられている

。あなたと私のすべての微蓋を含み、そして、間にあるように見える粒は、原始的な物体とエネルギーでできている。」(p96-97)

この記述は「ゼロポイントエネルギー」を意味しているのではないだろうか。次の記述はより明確にそのことをのべている。

「私の意識は覚醒していました。そして、ながれの中にいるのを感じています。目に見える世界のすべてがつながりあっていました。そして、エネルギーを放つ粒粒とともに、わたしたちのすべてが群れを成して一つになり、流れています。ものともとの境界線はわかりません。なぜなら、あらゆるものが同じようなエネルギーを放射しているから。」(p98)

1976年ある事件で逮捕され、翌年1月獄中で持病の腎臓病が再発、大量の血尿とともに命を長らえた、半年後執行猶予で釈放され外へ出た時、道路のわきに生えている草花が燃えいずるように輝き、語り掛けるように揺らめき、同じ命の同胞なのだ、同じ命の仲間なんだよと語りかけてくるのを驚きをもって感じ、歩いていたことを思い出す。後に、あるカウンターカルチャーの画家の絵の中に、僕が見、感じたと同じ生命の輝きが描かれていた。草がダンスをし、花が笑いあい、境界は解け、命が輝いて揺れ動いている。

これがひょっとして「真実の世界」なのかもしれない、と思ったりもする。

本書の最後部で著者は、右脳と左脳の働きについて、整理し記述している。

「右脳マインドには現在の瞬間]外の時間は存在しません。そして、それぞれの瞬間が情感で彩られています。生や死も今その瞬間で起きています。歓びの体験も、そして私たちを包むおおいなる存在との結びつきを知り、実感することも。右脳マインドにとっての「今」の瞬間は、一瞬にして永遠なのです。」(p324)

「今、ここにある一瞬は、あらゆるもの、あらゆる人々を「ひとつのもの」に結びつけ、それによって、右脳の心は私たちみんなを、人類という家族の対等なメンバーとして知覚します。つまり、私たちの類似性を知り、生命を支えてくれるこの素敵な惑星とのつながりを理解するという。それは、この世界にあるものたちがどんな関係にあり、どうやって一緒に集まって全体をお作り上げているのか、その全体像を描くことでもあります。共感したり他人の身になって考えたり、感情移入したりする能力は、右の前頭皮質のおかげなのです。」(p325)

「それに対し、大脳の左半球は、情報を処理する方法が全く異なっています。左脳は右脳によってつくられた内容豊富で複雑な瞬間のそれぞれを取り上げて、時間的に連続したものにつなぎあわせます。それから、左脳はこの瞬間につくられた詳細と、一瞬前につくられた詳細を次々と比較し、きれいな直線状に並び替える作業を行います。こうやって左脳が「時」の概念を明らかにしてくれ、瞬間は過去、現在、未来にわけられていくのです。」(p326)

「大脳の右半球が、ひとつのイメージを思い描いて現在の瞬間の全体像を認知するのは全く逆に、左脳マインドは、まさに微に入り細をうがつように、細かく細かく、細部にこだわり続けます。だから、大脳の左半球の言語の中核はあらゆることを説明し、定義し、伝えるために、言葉を利用するのです。」(p326)

左脳の「自我の心は、個性にのめりこみ、他人と違うことをほめたたえ、独立心をおおるの

です。」(p327)

左脳と右脳の連関については、「左右の大脳半球は、それぞれ独特な方法で情報を処理しますが、行動に関しては、左右の二つは密に連携して事を運びます。例えば、言語について言えば、左脳は文章の構文や、意味を作り上げる細部を理解し、そして、単語の意味を理解します。文字とはどんなもので、それがどのように組み合わせられて、概念(意味)をもつ音(単語)から文章が作り出されるのかを理解するのは、左脳マインドです。そして左脳は、単語を直線的に並べ、非常に複雑なメッセージを伝えることができる文章や節をつくります。

右脳は、言葉以外のコミュニケーションを解釈することによって、左脳の言語中枢の働きを補います。右脳マインドは声の抑揚や顔の表情、からだの身振りなどの微妙な言葉の「あや」を評価し、コミュニケーションの全体像を見て、その表情全体のつじつまが合っているかどうかを判断します。」(p329-330)

西洋個人主義への批判のように聞こえる。

人間は類的存在であること、人間やあらゆる生命は宇宙的存在であること、すべての生命は共通の存在であることを右脳は感知し、認識しうる存在であるを知り大きな希望を感じる。

左脳の発達をメインエンジンにして人間は、紆余曲折を経て右脳が感知し認識する世界と対立し矛盾する文明を築いてきたように思える。人間の文明を大きく転換しなければ人類の文明の破局は避けられないようだ。

右脳の世界と対立せず、矛盾しない文明を創造するために、政治経済的変革のみならず価値観、特に現代文明をリードしてきた科学の在り方、方向の転換が重要だと思う。

「奇跡の脳」は、人間とは何者か、人類はどうあるべきなのかを、人間が本来持っている脳力・能力から考える大きな気づきを与えてくれる。